

会報
国鉄闘争全国運動

国鉄分割・民営化反対！ 1047名解雇撤回！

181号
2025年6月18日

国鉄分割・民営化に反対し 1047名解雇撤回闘争を支援する全国運動事務局
千葉市中央区要町2-8 DCC会館内
Tel 043-2222-7207
nationwidemovement@yahoo.co.jp

東京高裁宛て
行政訴訟署名
3310筆
(25年6月18日)

裁判日程が9月19月に決まりましたので、1週間前までに集約をお願いいたします。

1047名解雇撤回へ新たな決意

9・19東京高裁 (包囲デモ 傍聴闘争) へ全国から結集を



高裁は解雇撤回判決を出せ！

国鉄1047名解雇をめぐる裁判(動労総連合・中央労働委員会命令取消行政訴訟)の裁判日程(東京高裁)が9月19日(金)午後3時30分となりました。2015年の最高裁決定に基づき解雇撤回・JR復帰、団交開催の判決を求める裁判です。当日は裁判所包囲デモ・傍聴闘争・報告集会を予定しています。午後1時30分集合の予定です。全国からの結集を訴えます。



11月集会に向けた闘いの決意と展望

千葉市民会館で6・15全国集会を開催

国鉄闘争全国運動は6月15日、千葉市民会館で全国集会を開催し、全国から520人が結集した。集会は佐野書記次長と自治体労働者の仲間が司会を務め、進化した。

開会あいさつは呼びかけ人の金元重さんが行い、続いて三里塚空港反対同盟の市東孝雄さんと改憲・戦争阻止！大行進の高山俊吉弁護士が連帯のあいさつを述べた。

動労千葉の関委員長による基調報告の後、韓国鉄道労組ソウル地本の4人が登壇し、カン・ジョンナム本部長は「闘う労働者は一つ。労働者の連帯に国境はなく、国境を超えることが出来る」と発言した。

JR東日本との新たな闘いについては、動労千葉の渡辺書記長と動労総連合水戸の照沼委員長が決意を述べた。

さらに、1047名解雇撤回の訴えを中村副委員長と藤田弁護士が行い、今後の闘いの報告と決意が共有された。廃線化との闘いについては、久留里線と地域を守る会が報告を行った。

動労東京環境アクセス、東京の自治体労働者、全学連の仲間たちも、それぞれの闘いの報告と決意を訴えた。

集会のまとめは呼びかけ人の浅川雅己さん(札幌学院大学教授)

関委員長 基調報告

は「勝利まであと一歩」の正念場にあります。国鉄分割・民営化が国家的な不当労働行為であることを暴き出し、必ず勝利の扉をこじ開ける決意のもと、本日の集会が開かれました。

労働運動の変革に向けた新たな出発としても、この集会を

かちとりたい。戦争が世界を飲み込み、政治・経済・社会、そして労働運動のあり方も変えようとしています。

連合は「労働組合」の名を使いながら、有事体制の下で労働者を組み込む役割を果たし、戦争阻止と資本主義の危機打開に

基調報告 (要旨)

国鉄1047名解雇撤回闘争

CTS職場 代表選挙 関委員長が大差で当選

職場大再編に立ち向かう職場の団結を

6月10日に実施されたCTS (JR千葉鉄道サービス) 幕張事業所の職場代表選挙において、動労千葉の関委員長がCTS

S労組委員長に大差をつけて当選し、18年から8回連続での勝利を果たしました。

選挙結果は、動労千葉105票(昨年比▲6票)、CTS

労組67票(同▲8票)、無効票

は団結した労働者階級の姿が必要。私たちは階級的労働運動の再建に向けた新たな出発点に立ちます。

11月集会の呼びかけ3労組と労組交流センター内で深刻な女性差別事件が起き、団結が揺らいでいることをお詫びし、問題の根本を問い直し乗り越える決意を共有します。告発した女性たちや支援する全国の仲間と共に闘うことを確認しました。

動労千葉は今年11月集会を単独で呼びかけます。現状に甘んじるわけにはいきません。動労

千葉は活動家だけの集団ではなく、国家の攻撃に抗して団結を守り、JR体制下でも解雇撤回

や外注化阻止の闘いを続けてきました。役割は今も変わりません。

11月集会は四半世紀以上にわたり、日本労働運動の変革と階級的労働運動の建設を掲げ、韓国・民主労総との国際連帯も築

労働条件・環境改善の取り組みが評価されるとともに、物価高騰のなかでの低すぎる賃上げ回答、コロナ以降の過酷なコスト削減、要員不足と労働強化に対する職場の怒りの表れでもあります。

いま、日本全体で中小企業の淘汰と労働者の切り捨てが進む中、JR東日本がその先頭に立っています。

JR東日本は、人事・賃金制度の抜本的改革を打ち出し、「能力昇給」導入や退職金制度の変

更を進める一方、安全や本来の鉄道業務が軽視され、ローカル線の廃止も狙われています。

労働者同士を競争させ、「経営の主役」として自己責任を押しつける新経営計画のもと、グループ会社全体に再編の嵐と矛盾のしわ寄せが押し寄せています。

闘わなければ生き抜くことも、未来を切り拓くこともできません。職場の過半数を超える労働組合が必要です。

94年の労働者集会の原点に立ち返り、以下のスローガンを訴えます。

①中国侵略戦争阻止一差別・排外主義と闘う労働運動をつくらう

②戦時下の労働政策転換に抗する労働運動をつくらう

③国鉄分割・民営化反対闘争の地平を生かし、連合路線と対決しよう

④反動石破政権を打倒し、闘う労働者の新党をつくらう

これらを基本に据えつつ具体的な闘争を展開し、全体の利益を掲げて勝利の展望を開きましよう。個別に負けても全体では勝っているという気迫が結集を生みます。

簡単ではありませんが、戦争を阻止し、階級的労働運動を復権させるため、11月集会の大結集に向け力を貸してください。共に闘いましょう。

更を進める一方、安全や本来の鉄道業務が軽視され、ローカル線の廃止も狙われています。

労働者同士を競争させ、「経営の主役」として自己責任を押しつける新経営計画のもと、グループ会社全体に再編の嵐と矛盾のしわ寄せが押し寄せています。

闘わなければ生き抜くことも、未来を切り拓くこともできません。職場の過半数を超える労働組合が必要です。

闘わなければ生き抜くことも、未来を切り拓くこともできません。職場の過半数を超える労働組合が必要です。

久留里線と地域を守る会 第3回定期総会開催

廃線阻止に向けて決意新たに

「久留里線と地域を守る会」は5月31日、君津市の亀山コミュニティセンターで第3回定期総会を開き、会員や沿線住民ら約60人が参加した。総会では、JR東日本が久留里～上総亀山間の廃線（バス転換）方針を示したことに反対し、内房線や外房線の関係団体と連携を強化しながら、沿線自治体・千葉県・国への要請行動などを推進することが決定された。

冒頭、三浦久吉代表は「JRと君津市がバス路線への移行を検討しているが、久留里線は地域の活性化に不可欠。絶対に廃線は認められない」と訴えた。続いて、ローカル線とJRの経営問題を研究している日本大学の桜井徹名誉教授や、米坂線の復旧を目指す市民団体からのメッセージが紹介された。来賓として君津市議、次に内房線と地域を守る会の梅澤和子代表、外房線と地域を守る会の早川隆雄会長らが登壇し、久留里線



存続への支援を表明した。

議事では24年度の活動報告と会計報告、25年度の活動方針案・予算案が提案され、活発な質疑応答が行われた。

参加者からは、地域への理解促進のために学者を招いた学習会を開催すべきとの意見や、駅前の装飾活動の紹介があった。また、「君津市長が廃線容認の姿勢を示しているなら、署名活動や面会要請を行うべきだ」との提案もあった。

亀山地区の元自治会長は、住民アンケートで49・3%が存続を希望したと報告。紅葉シーズの混雑ぶりや、ハイキングコース整備、パンフレット作成など、観光振興に取り組んでいる現状を紹介し、「久留里線は地域の未来に不可欠だ」と訴えた。今年は亀山神社が県文化財に指定され、秋には企画展も予定されている。久留里線の廃線による地域衰退への懸念も語られた。

最後に三浦代表が「久留里線は今、重要な時期を迎えている。これに打ちかつ運動を行っている。地域とともに頑張りたい。う」と呼びかけ、すべての議案が拍手で採択されて総会は締めくくられた。

改めて問う国鉄闘争の意義 「もう黙ってられない」―渾身のストライキ

国鉄分割・民営化攻撃は、現場の攻防としては1981年の第2臨調発足時の国鉄職員数（約40万人）を基準にすると半数の20万人を職場から追放する大合理化・国鉄解体計画だった。

国鉄当局は緊急措置11項目に基づき新規採用をストップし要員補充をせず合理化を強め毎年2～3万人規模の要員削減を強行した。職員数は85年初頭までに約28万人まで削減され、職場には「余剰人員」が作られた。

余剰人員の創出 貨物輸送は、貨物を操車場で目的別別に組成編成して送り出す方式（ヤードスタイル）が廃止され、トラックで輸送されたコンテナを集約ターミナルで列車に積み換え鉄道で長距離輸送する拠点間直行輸送方式（フレートライナー）が導入された。武蔵野・新小岩・大宮・新鶴見などの巨大ヤードが一旦に廃止され、貨物合理化の実施（84年3月ダイヤ改）で一気に「過員」が生じた。後に「人材活用センター」問題になるが84年6月には「余剰人員調整策」と称して、①退職勧奨制度、②一時帰休、③出向の3項目が各労組に提案された。

動労千葉や国労はこれを「首切り3本柱」と批判したが、やがて国労は3本柱を受諾していく。現場では3本柱を拒否する「3ない運動」が展開された。国鉄当局は3本柱を受け入れない動労千葉や国労、全動労に対し「雇用安定協約」を保障しないと通告。動労本部や鉄労、全鉄労には継続を約束した。動労本部は「働き度を高める運動（働こう運動）」を展開し組織を上げて3本柱を推進した。年配の組合員に退職を迫り、外部出向に積極的に応じていった。動労本部は「雇用安定協約のない国労はクビになる。国労組合員は新会社に行けない」と国労脱退を迫り、当局に対して国労や動労千葉との協約継続を認めるなど迫った。職場内の緊張は高まり、現場には怒りや不満、不安が渦巻いた。だが国労本部は「最終答申が出ればストで闘う」と言うだけで行動方針をうち出せず追い込まれていった。国鉄当局は、85年3月ダイヤ改だけで運転関係8千人、営業関係7千人の計1万5千人の要員削減を画策。運転関係では前年3月に動労本部が妥結した動力車乗務員の勤務制度改善によって従前の5割増しの労働強化を行い、乗務員を3割削減する攻撃が仕掛けられた。

85年3月ダイヤ改

合理化で余剰人員とされた運転士は駅で乗客整理などをやらされた。動労千葉は85年3月ダイヤ改をめぐる3本柱―余剰人員化に対し当局の不当な命令は拒否する順法闘争を打ち出した。千葉でも動労千葉と国労の組

合員が助勤として駅へ送られた。当局は、名札やネクタイの強制、点呼や口頭試問などを通して労働者の誇りを奪い、団結を破壊する攻撃を仕掛けた。動労千葉や国労の労働者は共に闘い、後に動労千葉のストに対する国労組合員の決起を生む伏線となった。

こうした合理化攻撃によって労働条件や鉄道の安全は無視され、3人に1人のクビ切りの不安が強まっていた。動労千葉は「座して死を待つより立つて闘おう」というマル生闘争時の国労・中川委員長の言葉を掲げて、あらためて実力闘争を打ち出した。動労千葉は安全確認行動を展開し、2月20～21日の48時間の非協力・安全確認の実力順法闘争を闘った。それは81年の三里塚ジェット燃料輸送阻止闘争に匹敵する闘争となった。この闘いによって組合員の意識も当局との力関係も変わった。

当時、自民党の金丸幹事長は「余剰人員問題をクリアできないければゼネストが起きる」とその危機感を募らせていた。他方、総評は「三池闘争以来の決意で闘う」として闘争本部を設置した。それは三池闘争後の「再就職闘争」のイメージを超えるものはなかったが、動労

中曽根政権と真っ向から闘った動労千葉

本部の松崎らは「いまはストで闘う情勢ではない」「誤った方針で国鉄を孤立させるべきではない」と強く批判した。民営化が先行した全電通も民営化反対を「甘え」と非難した。総評は5千万筆署名運動を提起し、最終的に3500万筆が集まった。こうした状況の中、7月26日の再建監理委員会の最終答申が出された。動労千葉は答申に対して次のように闘う決意を示した。

「われわれは、炭鉱労働者の去るも地獄、残るも地獄の轍を踏むことを拒否する」「われわれは30万国鉄労働者と家族に塗炭の苦しみ強い、国鉄労働運動の解体を通して戦争へ動員しようとする反動『答申』を満腔の怒りを込めて弾劾すると同時に、国鉄労働運動の戦闘的伝統を守り抜き、反動中曽根内閣と真っ向から対決し、1人の切りも許さず断固闘い抜く」

8月12日に520人の犠牲を出した日航ジャンボ機墜落事故が発生した。だが、分割・民営化に突き進む国鉄当局は安全問題を顧みることはなかった。動労千葉は85年9月に第10回定期大会を開催し、スト方針を確立した。ここまでの闘いの中で討論を積み重ね決意を固めつつあった。3人に1人の首切りで誰が残れるのか疑心暗鬼では団結は壊される。腹を据えて闘う以外に職場と団結を守る道はない。動労千葉には、組合員を信頼して決断と方針を示すなら労働者は必ず決起するとの確信が生み出されていった。

動労千葉の決断の背景には、反合・運転保安闘争路線があった。運転士は事故と隣り合わせの不安の中で運転を強いられていた。動労千葉は「少なくとも運転士がきちんと仕事をできるようにしなければならぬ。そのためには確固とした闘う方針が必要だ」と考えた。9月の定期大会で7つの目標が定められた。

- 1 国鉄分割・民営化阻止
- 2 10万人首切り合理化粉碎、雇用安定協約完全締結ほか
- 3 運転保安確立、国鉄を第二の日航とするな
- 4 国鉄労働運動解体攻撃粉碎ほか
- 5 全国鉄労働者の総決起実現、5千万筆署名貫徹
- 6 動労本部革マル追放、動労大改革
- 7 反動中曽根内閣打倒ほか

国鉄当局は85年11月末以降の雇用安定協約の破棄を通告。国労は3ない運動中止を決定し協約の延長を求めた。11月末が正念場となった。動労千葉は分割・民営化阻止と雇用安定協約の締結を要求してストを準備した。11月末の第1波ストまでの約2か月、各支部・地域・家族会で徹底的な討論が行われた。「動労千葉だけ闘ってどうなるのか」「弾圧をはね返せるのか」「動労千葉はそれらの声と正面から向き合い、率直に情勢や力関係を説明。闘う以外に団結を維持することはできない、闘えば勝利の展望はあると訴えた。

動労千葉の決起

動労千葉のスト宣言で情勢は転換し、またあらゆる勢力がストに動いた。11月17日に日比谷野音（写真）で布施宇一書

記長は次のように語った。

「もう黙ってられない。全職場で威張りくさっている当局を、29日のストライキで蹴散らしてやろう。誰が毎日列車を正確に安全に走らせているか思い知らせてやろう。死ねとまで言われて決起もしない労働者・労働組合とはなんだ。われわれは、動労革マルのような道を死んでもとることはできない」

スト拠点津田沼電車区と千葉運転区であった。国鉄当局は津田沼電車区の周囲に金網フェンスを張り巡らせた。警察権力はゲリラを口実に機動隊で包囲し総武線沿線に1万人の機動隊を配置。津田沼電車区では200人の組合員が籠城し、900人のスト破りの管理職らと3千人の機動隊と対峙した。動労本部だけではなく国労も業務命令を理由に運転手を乗務させる方針を取った。これに対し津田沼では、国労の運転士が「スト破りは許せない」と国労役員に抗議し、2人の組合員が国労を脱退して動労千葉に加入した。津田沼に来た国労中執に「スト破りは許せない」との組合方針を当局に通告させた。夜明け前の津田沼では「総武線は完全に止まる」の歓声が上がった。動労千葉1100人の組合員は国家権力を相手にストをうち抜いたのである。誰もが抵抗できない状況のように思われたが、分割・民営化阻止を正面から掲げたストのインパクトは強烈だった。動労千葉に対する共感と支援の声は急速に膨らんでいった。